

第2回 FD 研究会
授業アンケート

2008年11月12日(水) 文責 小林 隆

授業アンケートについて、担当の小林から以下のような話題を提供し、意見交流を行った。

話題提供

小林： 本年度より、学生の学習状況を把握し、それを授業改善に役立てるというように授業アンケートの趣旨をとらえなおした。授業アンケートから全学的な学生の学習状況を読み取ると、真面目に授業に出席するが事前・事後の学習はあまりしていないことが読み取れる。しかし、授業内容は理解できたと回答している学生が多い。この点を切り口として先生方からのご意見を賜りたい。

意見交流

室員： 解釈の違いがあるが、「理解できた」の意味合いが浅いのではないかと思う。例えば試験をやったときの実感で言うと、本当に理解している学生は100人に1人か2人だ。本当に授業を理解した上で書いている答案とは思えないレベルで、でも本人は理解したと思っているのだろうと。ちょっと危険な状態かなと思う。事前・事後の勉強をしなくても理解できたとと思っている学生がどんどん出てきたと解釈できて怖い。予習・復習しなかったらついていけないというのが私の大学時代のだけでも、そうっていない。

小林： 事前・事後の学習があまりなされていないのに、授業に出席して理解したつもりになっている。

室員： 文科省の基準で言えば1単位45時間という学習時間というのが設定されていて、授業時間というのは、本当はその中の一部である。従って、単位当たりの学習時間が確保されていないのが実態である。事前・事後の学習をあまりしていないのに熱心に授業に取り組みました。こんなことはあり得るのか。

室員： 実は今、半期32単位、年間64単位というのが単位の上限である。この上限は問題があるのでは。大学基準協会の認証評価の結果について、非常に厳しく指摘されている。つまり、年間32単位で1単位につき45時間の学習時間を確保したら実際に寝る暇がない。大学全体が単位当たりの学習時間を確保しようという発想になっていない。非常に構造的な問題だ。ぜひ、構造の問題に取り組んでもらいたい。

室員： アメリカ型は来週までに3冊読んでこいとか、4冊読んでこい。それこそ文字どおりの課題がある。しかし、現状は講演会に行くような感じで1回のみでわかる。だから、浅い理解の答案用紙である。それこそ週14回授業をやればやるほど、本を読む時間もなくなってしまう。昔の学生は休み時間、休暇中に本を読んでいたが、読む時間がなくなってしまうのだから、なおさら読まない。

室員： 授業には到達度が設定される。到達度はシラバスに反映されていなければいけない。その到達度に即して15回の事業が組み立てられていないといけないのだけれども、シラバス自体がきちんとできていない。文部科学省が要請しているのは、そういう到達目標をきちんと設定しなさいということと科目間連携を設定しなさいということだ。個別の到達度と、科目が連携しながらカリキュラム全体としての到達度を設定する。つまり、プログラムの組み立てができていない。

室員： 私の学部は履修モデルがあり到達度が比較的明確だが、それは国家試験があるから。しかし、国家試験を意識しすぎると専門学校になってしまう。非常にジレンマがある。

室員： 型破りでユニークなとんでもない授業が少なくなり、どうかなと思うこともある。

小林： 教員が求めるところまで学習が深まっていないのではないかという危機感が確認できた。本当はもっともっと深いのだというところを気付かせられるような授業改善に全学的に取り組んでいく必要がある。

以上のように、第2回研究会では、授業アンケートから読み取れた学生の学習状況の解釈に基づいて授業改善について話し合った。そして、個々の授業の改善を図る一方で、全体的・構造的な問題としても考えていく必要があることが確認できた。

この後、議論は授業の適正規模や授業環境のことに発展していった。人的・物的な資源を整えるためにはもちろん経費が必要であるが、キャンパス整備計画と連動して、可能な限りの努力を求めたい。

まとめ

以上のように、第2回のFD研究会では、明確なディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに基づいてカリキュラムのスリム化を図るとともに科目間の連携を図り、その中で学生の主体的で深い学習（事前・事後の学習を含む）を促す授業のあり方を考えて行かなくてはならないことが提言された。それは、つまり15回で完結する理解型・クローズドエンド型の授業ではなく、授業後に発展していく思考型・創造型・オープンエンド型の授業であろう。

また、平成22年度の全学的なカリキュラム改編やキャンパス整備計画とも連動し、更に学生の学習を促進していく環境を整える必要があることも改めて確認しておきたい。